

## 生の道程

### — 藁わらの香り —

府川 昭男

蒸し暑い汽車から土用駅に降りると、東のほうから田園の上を涼しい風が、そよと顔を撫でる。今乗つてきた汽車内の喧騒が嘘のように静寂となる。

改札を通り、見慣れた筈の駅前広場は玉砂利が鈍く反射する。汽車から降りたのは三人だけだった。頭の毛の薄い爺さんは、すぐさま頭に手ぬぐいを乗せた。四十搦みの女性は、黒い日傘を荒っぽく広げた。卓造たくぞうは白線が二本入った学帽を、被り直した。爺さんの下駄の乾いた音が、砂利に当たつて響く。二人は真つ直ぐ前へ歩いて行つた。卓造は左折する。

田舎道は舗装されず埃っぽいが、土埃を立てるような自転車は一台も通らない。疎らな集落を左右に見て、ゆっくり歩く。それでも汗が出る。特別な物があるわけではないが、なんとなく見慣れた風景に安堵する。

うねうねと続く砂利道を歩いて行くと、左右に稲田が青く広がる。近付くと稲の葉先は槍衾のように鋭く天に向かう。少し歩くと坂道、左に桑畑、右に竹藪を

見て坂を降りるとまた左右が稲田になる。遠く鉄塔が青空に突つ立っている。途中、幅二メートル程の水路を跨ぐ。右折した水路では、子供の頃、水浴びをしたどじょう鱈を掴まえたり、時には鰻うなぎに逃げられたことなどを思い出す。左側に高さ二メートルほどの、からたちの垣根が見えてきた。その垣根のあいだに入り口がある。今は門柱はない。突き当たりが母屋だ。

卓造が母屋に近付くと、まっさんが石臼を回していた。まっさんの名は升吉だけれど、何時の間にか、まっさんになった。

「あれ！卓造だ。お帰りなさい、しばらくぶりです。髪も長くなり、大人になったねー」

上半身は裸で、坊主頭に振じり鉢巻きが様になっている。まっさんは、住まいもなく妻もいないようだ。何時からここに來て奉公人になったのか、卓造は知らない。煙草を吸うとき以外は、いつも動いて働いている真面目人間だ。

「様は付けるなよ、でも半年になるか。まっさんは病

「気もしないし、元気で結構だ」

「へえ、わしゃあ、生来呑気もんだから気楽なもんさ。だから、元気なんだんべ」

「まっさんは乱杭菌を出して屈託なく笑った。

「ところで、今何を挽いているんだい？」

「ああ、これかい、上新粉だがね、奥様が団子でも作るんだんべ」

「そうかい、で、何か変わったことはないかい？」

「あるある、みなみんちに、荒木さんという家族が住むことになったよ」

「まっさんは、得意そうに鼻の下を手で擦った。大ニユースである。卓造も驚いた。

「えっ！、あんな所にかい」

「真ん中を仕切って、四人家族だそうだよ。夫婦と女の子二人で、旦那は東京の山の手のお屋敷抱えの植木屋さんだそうです。今も東京へ行ってるという話だけがね」

「そうか、あの戦争から、まだ二年だからなあ。着る物、食べ物、住む所が無いと、人間らしい生活はできないというものだ……。卓造は日陰に入って汗を拭きながら、まっさんを見ずに独りごちた。

「まっさんは、また石臼を回し始めた。

卓造は、家の中に一步踏み入れた。涼しい。藁葺き屋根の母屋は二年毎に修復か葺き替えをする。煮炊きは薪や落ち葉、また草木の乾燥したものなど、燃える物は何でも利用する。だから柱や天井など、すべて真っ黒になる。ただ、夏涼しく冬暖かいのは利点だ。

卓造は東京での生活ぶりなどについて、物の値段は高いが少しづつ生活物資は増えていることなどを話した。

「ところで、みなみんちに疎開の人が入ったと言う事だけど……」

「ああ、荒木さんという人だけど、少し北の方に疎開していたんだそうだが、何か住みにくくなったようで、内に来ることになったよ」と母の話である。

みなみんちは、トタン屋根葺きで、一階建てだけれど天井板もちゃんと張られている。ただ、時々麦や稲の収納場所として使われていたから、床などが荒れていた。むしろや、シーツなどで床面が覆われていた。

卓造が覗いてみると、荒木さんの奥さんは上半身裸で、首に濡れ手ぬぐいを掛け、辛うじて胸を隠している。そんな具合だった。

「あらまあ、こんな格好で、卓造さんのことは聞いていますよ」

荒木さんは恥ずかしげもなく、やや暗い部屋で団扇を使いながら、こちらを見た。

「卓造です、よろしくお願いします」

目を反らしながら、卓造は挨拶した。二人の娘は学校に行っているようだ。

荒木さんは、浴衣の上半身を脱いでいたが、痩せていた。

昭和二十二年三月、関村卓造は（四年卒業も可だった）五年間の中学校生活を終えた。そのうち、二年間は勤労働員などでほとんど勉強はしなかった。戦争が終わるまでは、青山製作所に一年間ほど旋盤工として働いた。工場内にはプレスやボール盤などがあり、それぞれの機械に徴用工の人達が就いていた。不思議なのは、敵性語として使用禁止の筈なのにドリル、スパナ、ドライバーなどの言葉が当たり前のように使われていることだった。弁当も粗末なものしか携帯できない。学校でも弁当箱を開けると、担任の先生がそれぞれを見て回って、白米などと知れると怒られるのだ。贅沢は敵なのである。

こうして、ひもじい思いをしながら、毎日青山製作所に通った。支給品の工場服は、太い繊維で織られた

ブルー色の、いかにも安物の感じだった。これを毎日着てベルト掛けの旋盤を操作して、段々ベルトの変速も覚え、ネジキリなども出来る様になって行く。

卓造の旋盤は、この工場の一西側に据えられている。白く塗られた鋳物に罫書きの入った塊を図面に従って加工する。この工場は、どうやら対空二連砲を作って居るらしい、噂だが、どこの部品であるのか卓造は知らない。

休み時間になり、独り卓造が外に出てみると、十二メートル先に女性用トイレがあり、カーキ色のもんぺ姿の若い女の子が、此見よがしにもんぺを上げ下げして卓造を挑発するのだった。いつも三人か四人の乙女のような。

通学は通勤となり、八高線で土用駅から児玉駅まで乗り、それからバスに乗って本庄駅まで行くわけである。このバスは木炭車で後ろに円筒の鉄製タンクを積んでいる。冬になると、機関部を練炭で暖め、クランクを一年先輩の男が懸命にまわして、やっとエンジンが掛かるといふオンボロバスだ。

乗客は二十歳前後の女工さん達が大半で、男は動員学徒しか居なかった。座席は無く、全員立ったまま、ぎゅうぎゅう詰め、ときには女性の胸が背中に押し

つけられたりした。

卓造は、この女性たちにかわいがられ、ある時一人の年上女性に呼ばれ、彼女の家に誘われた。夕方だった。誰も居ない部屋で、純情な卓造は何もできない。

手作りの金属製指輪を貰って、誘われても卓造は手さえ握ることが出来なかった。彼女は独り暮らしのようだった。戦争中でも、人の心はやはり美しいのだ。

一台しかない、この木炭車は昭和二十年五月に廃車となった。

昭和二十年六月から卓造は、八高線を倉賀野駅で乗換え高崎線に乗り本庄駅下車というコースで通学することになった。倉賀野駅では乗換えに十五分待つ。ここで卓造はタバコを覚えた。同級生の男が巻きタバコを一本持つてきた。これにマツチで火を付け、三人か四人で回しのみをする。卓造は初めてだから、ゆっくり一口吸ってみた。やんぬるかな、思わず咳き込んだ。以後少しずつ覚え、少し大人になった気分になる。

昭和二十年八月十五日（1945年）、汽車が倉賀野駅に着いた。暑い。

「降りないで下さい」

駅員の声が聞こえた。車内が騒つく。なにか変だ。

汽車は動く気配もない。

十一時半頃か、軍刀の音を立てながら左手に持った軍服姿の男が駅舎に走って行った。

「戦争が終わったんじゃないか」などと不穏なことを小声で言う者がいる。「まさか」と言う声がある。車内は、囁く声があちこちで起こる。しかし、意気消沈の雰囲気が漂う。

突然、ラジオの拡声器音が響いた。「あれは、天皇陛下の声だ」と誰かが言った。

駅舎と汽車は少し離れていて、ラジオの雑音が大きく響く。何を言っているのか全く分からない。「きつと、戦争は負けたんだ」と言う声が聞こえる。車内の騒がしきは消え、時間の動きを忘れる。

「この汽車は、八王子に向かって引き返します」と言う駅員のメガフォンによる呼び掛けが車両ごとに行われた。何時間停車していたのか、もう分からない。

仕方なく、それぞれ乗車駅に戻るしか方法はない。卓造や級友らも帰る。

「これから、どうなるのかなあ、どうするんだ」、誰も答えられない。

「とにかく、帰って学校からの通知を待つしかあるめえ」

なんとなく納得して、それぞれの自宅に帰る。もんぺ姿の女性や戦鬪帽の男達が力無く汽車を降りてゆく。敗戦、終戦と苦役からの解放がぼんやり脳裏をかすめる。

卓造は整理のつかない頭のまま、いつのまにか家に帰った。

翌日、卓造は父と一緒に田圃の仕切り土手の上に立って、南東の空を眺めていた。二人共まったく喋らない。以心伝心で通ずるものがあるのか。青い空を、ただ黙って見つめていた。静謐。昨日と今日の変化。戦争と敗戦。諸行無常。噫。

十日ほど経ってから、卓造は勤労働員先の工場に、あの青い作業衣を忘れたことを思い出した。その後の様子や本庄の町の変わりようを少し見たかったのだ。汽車は八高線も高崎線も走っていた。汽車の窓から見える田園風景は何も変わったところはない。動員先の青山製作所へ向かった。人通りは少ない。途中の家いえにも損傷の痕跡はない。町外れの工場に着く。門は無くなり、工場の入り口も開いたままだった。ついこの間まで使っていた旋盤の所まで歩いて行く。しかし、掛けておいた筈の作業衣は無かった。こんな物まで持

っていく奴がいるんだと、なんとなく納得した。工作機械はあるが人間がない建物は殺風景そのものだった。あのモーターやベルトの音、地響きするプレス機の轟音、大きな人の声、あれは何だったのか。工場も空虚、卓造の心も空しい。

他の工場も見ようと思つたが、止めた。足が向かないのだ。

生きるか死ぬとかという戦場に行つたわけではないが、戦争とは何なのか、卓造は考えた。戦争は、人がなくなり物がなくなるという事だと思つた。

九月になって、中学校から通知があり、復学してよいとのことだった。学校に行ってみると、転向してきた者や白いマフラーを首に巻き付け威張つた予科練がえりの者、陸海軍の復員者など、そのままの服装で校庭に集まつた。校長から挨拶があつたが、聞いている者は、ほとんどいないようだった。

敗戦とは、こういうことかと思う。ただ、ここでは原子爆弾をくらつた訳でもない。直接照明灯に脅され爆弾や焼夷弾を浴びた訳でもない。ただ、マッカーサー総司令官、駐留軍、GHQ、戦争犯罪人、降伏文書調印、民主化改革指令など次々と国の改革が進むこと

になれば、やはり複雑な心境になる。

学校も一時的な学制改革により、同級生のうち三十人は昭和二十年末をもって四年終了とし上級学校進学  
の道が開かれた。翌二十一年三月（四年制）卒業者三十九名、同二十二年三月卒業者は百三十五名という変則的な三回の卒業形態となった。合計二百四名、卓造が入学したときは、百五十名だったから五十四名も転入学者がいたことになる。

各科目担当の先生も、戸惑いは隠せず、中途半端な教導に思えた。

卓造は大学予科に入学し、半年ぶりに実家に帰った。家族や、まっさん、みなみんちの荒木さんにも会った。

かの大戦後のGHQ指令に基づく、いわゆる農地改革により、卓造の関村家も大半の農地を小作人に強制買収された。これは国が買収したことになる。

それでも、卓造の家の田畑は広く、父母や子供四人が働いても彼方あちこち此方こちの農地が雑草だらけになるのだった。隣の桑畑は雑草一本もないのに、関村の畑は葉草が五センチ、十センチと日ごとに伸びる。田圃もしかりハグサが稲の回りを所せましとはびこるのだ。

卓造も、それを見れば手伝わざるを得ない。勉強も

進まない。

ただ、昭和二十二年頃になると、農薬（除草剤）が使えるようになり、田の草取りは無くなり、実に楽になった。後に農薬残留が人間を脅かす。

こうして八月末、朝鮮からの引揚者である叔父夫婦他の人達が来るといふ話を父から聞いた。

叔父の富夫について、卓造の知ってることは浦和師範学校に入学後、何時のまにか赤と呼ばれる共産党に入り活動したのだった。卓造が十二才頃、囲炉裏を囲んで父に金をせびって、言い合いをしているところを一回か二回見ている。そして、その頃必ず前の街道に一人の警官がサーベルをぶら下げて、こちらを監視しているのが不気味だった。

その後、富夫は電気会社に勤めていたが、何時のまにか朝鮮（当時は日本領地）へ行き、結婚したらしく、盆暮の付け届けが、その妻の名前・夏子として関村家に送られて来ていた。そして、終戦・敗戦となり、夏子の母の元実家の山口県に帰郷したが折り合いが悪く、結局辺鄙な関村の家に来るようになったようだ。

暑い日、駅の方からボー・ボーと汽車の音が聞こえた。そのとき父から、「ああ汽車がきた。弟一家が来るぞ」といふ話があった。

なんとなく都会の雰囲気を持っているだろう、その訪問者達が珍しく、卓造や子供達二三人が街道に出て見る。すると、田舎にはない洒落た明るい洋服の女性や格好のいい男たちがこちらへ歩いて来るのが分かった。

卓造は富夫叔父さんしか知らないから、「今日は」と挨拶だけでしたが、こんな田舎では自己紹介するよくな風習もないので、だれが誰かは分からない。外見だけで見ると、叔父さんの妻らしい人、その母と大人の女性、背の高い男とその弟の六人だった。

夕食は、ざるうどん風の麵にかつぶしの入った澄まし汁が用意した。客のみんなが汁の中の鯉節を残していた。母は不思議に思って「みんな、かつぶしを食べないんだね」と、誰に言うともなく愚痴をこぼした。田舎では勿体なくて一緒に飲み干すのが普通だ。

寝る場所は床の間のある十畳の部屋があてられた。ここに四日程寝泊りした。

富夫叔父さんは、ここへきてから、すぐに新宅の栄次さんと一緒に、みなみんちの荒木さんの隣の八畳間の改修に取り掛かっていた。ここには西側に上後架(便所)があり、突き当たりまで廊下がある。また裏表には荒木さんの所と同じに廊下がある。一間幅の床の間

もある。トイレには白い陶器製の金隠しがあり、なにか青色の花模様が描かれていた。

この家は、父の父、卓造にとっては祖父が村長の時に建てた物だそうである。だから、結構洒落た造りになっている。しかし、上手く使わないし手入れもしなかったから、荒れ果てていたのだ。叔父の栄次さんが手配し厚紙で隣の荒木さんとの境目はばっちり糊付けした。障子の上に何枚も重ね張りしたのだった。

修理は四日程で終り、四人がみなみんちに移り、富夫叔父夫婦は母屋の納戸に住むことになった。この四人の姓は黒木さんと言った。

この黒木さん一家は中流の勤め人らしく、駅の側の丸通(日通)関係の家に家財の一部を預けていた。それを引き取り、五日目に引き越した。寄居町の銀行に預金手続きはしたが、当時は封鎖預貯金法令により、一定の金額しか下ろせなかった。その頃貯金があることは羨ましい限りである。この辺の農家は銀行などに縁のある人など殆どいない。皆その日暮らしである。

ともかく、こうして黒木の家族は、やっと落ち着いて生活できるようになった。風呂はどうするのか見ていると、黒木の母親と息子二人は隣の中んちに行って貰い湯をしていて、その次女の澄江と富夫叔父さんの妻

の夏子さんは卓造の家の風呂を利用していた。

卓造の家は背戸んち、みなみんちの西から七メートルほどの所に中んちがあり、その登り坂を七メートルばかりいくと上んちになる。みなみんちの黒木の部屋からは、中んちに行くほうが、卓造の背戸んちに行くより大分近い。中んちには小母さんが一人で住んでいて、養子の男は職業軍人だった。その人はまだ帰還していなかった。

夏の入浴は、裏庭に風呂桶を置いて、ゆつくり入る。楕円形の木製桶が水漏れし始めてきた。父はどこで知り合ったか「近いうちに風呂桶の新しいものを作って貰っている。今度の桶は、移動の出来ない据付型だから手伝え」と言った。

裏庭の井戸の近くに土を掘り、耐火煉瓦をコの字型に積んだ。薪等を焼べる入り口から傾斜をつけ、その低くなった所から土管を斜めに付ける。これが排煙筒になる。

五日ほど経って、風呂桶がやってきた。予想どおり四角形の桶だったが、内外とも鉋がけしていなかった。だから、粗末に見えた。それでも底板は、ちゃんと鉄板が張ってあった。そして中には木製の簀子が置かれていた。これも製材したままだ。「なるほど、この板が

浮き上がり、入浴の時静かに下に踏み込むやつだな」と卓造は思ったのだ。

ある日の夕方、卓造の四歳下の弟が「明日、高崎へ映画を見に行かないか」

と、黒木の澄子さんが誘ってきたよ、卓造さんと二人がこいって…。

卓造に異論などあろう筈はない。

翌日、示し合わせて八高線に乗り高崎に向かった。高崎の町はさすがに大きく、通りの町並みはそのままで綺麗に残っていた。ここはあの空襲には危うく逃れたのだ。その代わり隣の前橋は大空襲を受け、壊滅状態になったようである。

ところで、澄子さんも高崎は初めてきたので、地理には詳しくない。途中の店で映画館を教えて貰って、目指す映画館に着く。映画は「我が青春に悔いなし」で、原節子主演だった。筋書きは余り覚えていない。

卓造は、澄子さんと一緒に来たことに興奮していたようだ。男女として、要らぬ疑いが掛けられないように澄子さんは弟を連れてきていた。

一週間後、また高崎に行き、ソ連映画「石の花」を鑑賞した。これは、独特の幽玄さをもたらすもので大



変引き込まれるものが有った。

戦争が終わった開放感から若者は漸く自由になつたことを体現するかのようだった。わずか、半年の間に、この地方では、いわば復古調とも言うべき演歌の歌に合わせて踊るといふ芝居がかった催しが、あちこちで開かれていた。『名月赤城山』や『旅笠道中』ならば、カツラを着け、着流しに一本差という姿で、力強く踊るのである。レコードに合わせて、最後は見えを切つて、格好を着けアピールする。顔には白粉おしろいをつけ一端いっぽうの役者気取りになる。女性も負けず劣らず、派手な着物を着て、たおやかに踊る。場所は、公会堂や神社の神楽殿だったりであるが、観客は外だから雨の日はなるべく避ける。現代ものも踊るけれど、多くは鬻物まけものだったので、やくざ踊りと呼ばれていた。

どこで、ニュースを得てくるのか、また澄子さんから誘われた。例の四人で村のあちこちの会場に行き、踊りが上手いとか上手くないとか勝手に批評しあった。この踊りも指導者がいたようであるが、ねたもなく、隣村から応援が来たりしたが踊る方も覇気がなくななり、見る人員も少なくなつて行く。それでも卓造は雨の夜などに相合い傘で、少し手が触れただけで、どきつとするが澄子さんは何の反応も示さなかつた。

星が綺麗に見える静かな夜だった。卓造は、のんびりと例の長方形の風呂に入っていた。すると、ゆつくり女性が近づいてくる。暗いが、風呂の火が、彼女の足から顔と段々照らして澄子さんであることが分かる。「どうですか、湯加減は？」と言いながら、火口の前むしろの筵むしろに座り込む。

「ええ、まあ」と卓造は生返事をする。

澄子さんは、桑の枯れ枝を二三本焼くべる。

「私ね、二十七歳になつて結婚してないなんて、おかしいと思うでしょう、卓造さんだつて」

「いえ、そんなこと……」

「いいの、本当はね、私結婚したことがあるの。ただ病気を移されたから離婚したの」

「え！」

「でもね、今はもう治つているの。ただ赤ちゃんも、もう生めなくなつているのよ」

「はあ、そうですね、いろいろ苦勞があつたんですね」

「私の愚痴と言うわけ、分かつて貰わなくていいの」

澄子さんの顔は下向き加減で、火照りの様子は見えなかつた。

翌日の夜、この日は星が見えなかつた。卓造が風呂

に入っていると、また澄子さんが、現れた。裏庭には昨夜と同じ誰もいない。風呂の火口だけが、ぼんやり明るい。

「昨夜は、私の秘密を話しちゃったわね、どう思ったかしら」

卓造は、昨日風呂から出たあと、澄子さんの話しを反芻して<sup>はんすう</sup>いた。子供が産めなくなっている、ということが少し気になっている。

「ええ、でも澄子さんが悪い訳ではないし、ぼくからみれば仕方無いという所ですね」

「あら、許してくれる訳なのね」

「今更その人を責めてみたって、元には戻らないし、だからといって澄子さんの心の傷は簡単には癒えないでしょう」卓造は分かったようなことを言ってみる。

「そうね、こういう話<sup>わ</sup>は誰にもできるわけではないし、私卓造さんに気を許してしまっただようね」

「でも、ぼくは経験がないし、本当は良く分かりません」

「それはそうね」

澄子さんは、少し間をおいて考えている風だった。

急に「あなた悩みがあったら、なんでも聞いてあげるわよ」と言った。

卓造は有るとも言えないし、無いとも言えない。迷った。

「少し有るような……」

「私はみんな言ったのよ、だからあなたも言いなさい」

「言いにくいなあ、では側に来てくれますか？」

「いいわよ」

澄子さんは、筵から立ち上がって卓造の側に近寄ってきた。風呂桶から卓造が立つと、これが少し高いから、卓造は上から澄子さんを見下ろすようになる。そして暗い。

「あの、触りたい」

「何処を……」

「胸を」

「そこだけで、いいの？」

「いや、その、なんというか……」、卓造は言葉に窮した。

「分かったわ、すこし恥ずかしいのね。私、あなたの言うことを許しちゃう」

言うことを許すのではなく、行為を許すらしい。

「じゃあ、許す場所が必要ね？、あなたが決めるのよ。

私は来たばかりで何も知らないから」

卓造は秘密の場所を見つけないならならぬ。

話が長すぎたようだ。「まだかいー」弟の声だ。「後でね……」と卓造は澄子さんに小声で言つて、彼女を帰した。

母屋から見て左側に、手前がまっさんの住処、続いて作業小屋、真正面は街道との出入り口、右手に蔵がある。大正時代に庄三郎さんが作った蔵だから、丸の中に、床の文字が、漆喰で鮮やかに浮かび上がっている。外見は立派だが中には金目の物はない。

卓造は作業小屋に目を付けた。ここは街道に近いが、みなみんちや母屋から離れている。夜の秘密基地としては、大変よろしいと思えた。

善は急げという、だが善ではない。いま考えているのは邪なこと。でも二人の合意のもと、いつときかの愛、いや快楽を求めようとしている。葛藤はある。

翌日の午後、卓造は作業小屋を澄子さんに伝えて、今晚九時頃どうかと聞いた。

「早いね、八時半がいいわ」と澄子さんの返事だった。何が早いのか、よく分からないが、ともかく了解されたのである。卓造は、当然のように、ときめきを覚える。

小屋の引き戸を静かに引く。薫の香りは、新しい畳

表の匂いがした。この逢引がどういう展開を示すのか卓造にも分からない。

作業小屋の奥の方は稲藁が二十センチばかり積まれていて、不断はここに座つて野菜や芋類などを選択したりする。自然に藁布団の役目を果たせるもののようにだ。

手拭で作った浴衣を着て待つていた卓造が、妄想に浸っていると、ためらうかのようにそつと戸を開けて澄子さんが入つて来る。引き戸の上に明かり取りのガラス窓が付いている。彼女の輪郭がぼんやり分かる。「待ったかしら」澄子さんが囁く。

「いえ、そんなに……」

澄子さんは、卓造の横に寄り添う。中肉中背の彼女にたいし、卓造は柔道をやっていたので筋肉質である。どうしていいか分からないと、彼女はまず手を握つてきた。そうして自らその手を自分の胸に差し入れた。卓造は、ふっくらした胸を、そつと、そして全部を掴んだ。初めての感触に彼は空想から現実を見る。衝動にかられる。

「慌てなくていいのよ」と言われた後は、全部を澄子さんに任せる。彼女は下着を付けていなかった。

柔らかい紙の香りが、ほんのりと匂う。

月は出ていない。

昨年、東京などではDDTという防疫・殺虫剤が散布されたが、地方の田舎等では除草剤がまかれ、除草には役立つが希釈度を間違えて人体に悪影響を及ぼしたりした。と同時に蚊が退治された。以前は蚊柱が立つほど物凄いものだった。蠅や蚤・虱も居なくなり、アメリカザリガニだけが生き残った。なぜか水は澄み、彼等だけが動き回っていた。

長月、重陽の節句だからといって、特別に祝う訳ではない。ただ澄子さんの住むみなみちに呼ばれた。卓造が覗くと、「どうぞ、お入りください」と澄子さんの母親が言う。

「失礼します」と言いながら卓造が上がると、「どうぞ、どうぞ」と薄い座布団を指し示す。

「今日は、ちよつとした物を作ってみました」と母のつよこさんがお茶とヨモギ餅風のを差し出した。やや小振りではあったが、甘かった。

「甘い、田舎では砂糖など有りません、だから美味しいです」

「そう、それは良かった。突然こちらへお邪魔して心苦しく思っていますよ」

つよこさんは、一人で家族を支えているように、穏やかな口調ながらしつかりした態度をみせた。生まれつきなのか朝鮮で鍛えられたのかは分からない。

「あら、卓造さんは、そちらなの、そうですか！」隣の荒木さんの声である。

「いえ、初めて呼ばれて来たんです」

「卓造さんは、少しですが東京で垢抜けされたようです」、つよこさんが言う。

「左様でございますか、こちらは江戸の下町っ子でございます」

荒木さんは、啖呵をきるが如しである。

「でも、少しは山の手も勉強なさった方が、ご主人様のためにも、いいのではございませんか」境目に厚紙が張ってあっても、声はよく聞こえる。

「大きなお世話でございます」荒木さんも譲らない。どうやら、前から諍いは続いていたらしい。

「やめて下さいよ。お隣り同士ではありませんか、戦争が終わってやっと平和になったんですから、仲良くしましょうよ」卓造は争いが嫌いだ。

「そう言ってもね卓造さん、高飛車に出られると、はいそうですかと言えない質なのよ」

荒木さんは卓三に伝えようと、すこし大人しくなる。

「誇りがあるんですよね……」と、つよこさんは、また一言返そうとしたので卓造は、

「もうやめましょう、すくなくとも僕のいるときは喧嘩しないで下さい」

「御免なさいね、あなたの前で、いい大人が、恥ずかしいです」

しおらしく、つよこさんは、うなだれる風だった。一緒にいた澄子さん、姉の夏子さん弟も、為す術なしと、みんな黙っていた。

人間関係とは難しいとは思っていたが、目の前で起こると、その真相が何なのか究明したくなる。しかし、他人同士が壁、いや紙一重で住んでいることに問題があるようだ。

必然なのかも知れない。

何時のまにか、朝夕が少し涼しくなってきた。秋は収穫の時期である。囲炉裏が恋しくなってくる。卓造も時には収穫を手伝う。

サツマ芋は戦時中、とにかく収量を増やせば良かった。味は二の次だった。まずい品種が増産された。太白などの晩生種は僅かしか作らない。このころでは、味が一番上等だった。一時、東京などから買い出しで、なんでもいいからと言って、いも類を買っていったも

のだが、このまずいいもを、どう工夫して食べたのだろうか。

囲炉裏は、朝昼晩と、普通三回火を使う。三時になると太白芋を囲炉裏の残り火の横の灰の中に差し込んで置く。一時間ばかり放っておくと、旨い具合に焼き芋が完成する。

この「焼き芋」が、馬鹿にならない。じっくり焼くから水分が抜けて、甘くて旨いのだ。ただ、これが三人か四人で適当に、芋が差し込まれているから誰が何処に入れたのか正確には分からない。

ある日、富夫叔父さんの妻、夏子さんが、「私が入れて置いた、お芋が無いの」と言い、叔父さんに泣き付いた。さあ、大変、「誰が取ったのだ」と叔父さんが聞いたって、誰も分かりはしない。どういうわけか囲炉裏に入れるのは、卓造、弟、妹、たまには姉、夏子さんは途中から割り込んできた格好だ。夏子さんは、この芋の甘さにはまってしまったようだ。叔父さんは、一計を案じて竹筒風のへらを作り、名前を書いて、芋を入れた場所に差すようにした。

卓造は、作業小屋での密会ばかりでなく、夜の神社や小学校でも澄子さんと愛しあった。

小屋での出来事は、奉公人のまつさんには、悟さきられてしまったようで、

「卓さん、旨くやっているようだね」と冷やかされた事がある。

富夫叔父さんは、何時までもこの仮住まいでいる訳にもいかないと思っていた。そこで兄に当たる卓造の父に談判を申し込む。つまり金子きんすの要求である。

父は自分の親が村長であったから、現金を持って多少は遊んだようだ。その村長は、金に困って土地や山を売りに来る人達から、何十町歩という広い地域を現金で買った。そして、みなみんちも建てたのだ。しかし、ある日突然その村長は脳出血で半身不随となり、長く病んだ。卓造が四歳頃亡くなった。

卓造の父は長男で、やや甘やかされて育ったから生活上手とはいえない。金儲けなどは下手な方だ。母と知り合った頃は、自分の父が村長だから、格好を付けて半ば強引に結婚に持ち込んだようだ。母は当時美人だと評判だったらしい。今でも働き者である。

父と富夫叔父の交渉は、昔のように喧嘩けんかごしになり、裏山の杉の木を切り製材してから熊谷まで運んだ。杉は何十本切ったのか、卓造は知らない。

四年後、卓造が熊谷を尋ねた時は、裏通りではあつ

たが、周りに引けを取らない程度の家ができていて、しかも男の子が二人いたのにはびっくりだった。

七五三の祝いで荒木さんは、子供二人が着飾った姿を見せようと卓造にも声をかけてきた。女の子二人は荒木さんには似てなくて、凄く綺麗で美しかった。卓造の兄弟姉妹やなかんちの小母さんにも見せに行った。卓造は写真を撮ってあげた。とにかく綺麗だ。だが黒木さん一家は澄子さんを含め誰も顔を出さなかった。

お正月が過ぎて、卓造は再び東京へ行き勉強することになった。澄子さんとは、名残惜しいものがあったけれど、身も心も学問に傾注することが今は大事である。

そうして、大学の単位取得も終り四月に帰郷した。うねうねした道路は湿っていて、埃は立たない。自転車が二三台通り過ぎる。稲株には緑葉がちらほら見える。相変わらず鉄塔は、すっかり突っ立っている。

変わらない故郷は何故か、いつも懐かしい。父母に会い、近況を尋ねる。

「澄子さんは、隣村の電器屋さんと結婚したということだよ」と母が言う。

それから、黒木さん一家は、息子さんが就職できたので、皆大宮に引き越したという。

「黒木さんは、山の手の豪邸の植木職人だから、その家の敷地の片隅に家を建ててもらい、そこに引き越して行ったようだがね」母からの話しだ。

みなみんなちに行つて見ると、がらんとして誰もいなかった。

例の作業小屋にも行つてみる。何の変哲もない。ただ、あんなに激しく燃えたのに、一言もなく、別れてしまえるものか、半ば呆れ、また憤懣やる方なしの心境になる。

喜怒哀楽は、人生の糧か……。

(終り)